

いう、隠された感情を伝えられていないはずだ。それに比べ、「誇りに思う」や「あなたがうちの子でうれしい」等という表現は、子どもの存在そのものをありがたいと、簡潔にも直接的に表現していて、なんとも魔法のような言葉ではないか。

これらの言葉を知ってから今まで、いろいろな機会に“Thank you...”とか“I’m proud...”に代わる日本語で子ども達をほめようとしたが、結局、肝心なときにうまく「ほめたい」感情を表現できる言葉が出てこず、取りあえず Hug（挨拶の一種で、抱き締める行為）をすることで、少しでも親心を汲み取ってもらおうとした。また、ほめる言葉を使うのが無理でも、子ども達にはできるだけポジティブな言葉を使うおうと、努力していたつもりだった。しかし、悲しい事にその努力は、私の勘違い（思い込み？）の賜物なのか、子ども達のためには余り役に立っていなかったようなのだ。

今、北カルフォルニアに住んでいる長女が帰省している。久々に三人娘がそろい、家族そろってのお遊びに「百人一首」をやろうということになった。いつもは、女性のカルタ取りバトルに参加したくない夫に読み手となってもらうのだが、どういうわけか、三女が「上の句」の読み手役を買って出た。

三女が読み手になりたいと言い出して、「え、大丈夫？」と、私はつい口にしてしまった。日頃、子ども達とめったに遊ばない夫が、珍しくその気を見せていたし、上手に読めなければ、遊びの腰を折ってしまうと思ったからだ。ところが、姉たちは、「大丈夫よ、やれば出来るようになるから、練習してみたら。」と薦めたのだ。歌を上手に読めなければと、心配したのは私一人だったようで、結局、三女が読み手になった。姉たちは、一生懸命和歌を詠む妹に対して、最後まで「じょうずじゃない！」と言って三女をほめることに終始した。

姉たちの「じょうず」は「信頼」という感情を表すほめ言葉になり、私の「大丈夫？」という心配は、姉たちとは全く反対の感情を表す言葉ではないか……。まさに次女が私を「ほめ下手」と指摘したとおり、遊びすら「アチーブメント」として考える母親だったのだ。

実は、次女が私について意見したのは「アチーブメント」の事だけではなく、その続きがあったので、お話ししよう。「お母さんは、今まで、あなた達、子どもの優しいところや頑張り屋さんだというところをほめて育てたつもりだったのになあ。」と言うと、「多分、お母さんが言うとおりに、お父さんや知り合いの人には、私たちの事をほめてくれていたのだと思うけど、でも、私たちには直接言ってくれていないでしょう？お母さんが私たちに言ってくれない事を、私たちは知りようがないからね。」「私たちはいい子だと言ってほめてもらいたい。学校やピアノの出来がよかった事をほめるから、私たちはアチーブメントで親に認められようとして頑張っている事を、早く知ったほうが良いよ。」「何事も、始めるのに遅いという事はないから。ね?!」とお説教された上に、励まされたのだ。

次女にお説教されはしたが、このメッセージは、次女が大人になったから言えた言葉だと、真摯に受け止めずにはいられない。

恥ずかしいのだが、“I’m proud of my girls.”と、誌上を借りて、言わせてください。

松本康子

まつもとやすこ

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人となった。このコラムでは、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私と子どもの悪戦苦闘の姿を紹介。

編集長から一言

前号で一休みした康子さんの再登場です。タイトルは「海外で共に育った」ですが、過去形ではなく現在形のバトルの話です。

この号の大迫先生のコラムの中で、石川さんのお母様の「息子のことを誇りに思います」という言葉が紹介されています。康子さんは誌上を借りて“I’m proud of my girls.”。海外で子育てに苦労したお母さんへのご褒美でしょうか？

自分の子育てを批判されたものの、完璧にバイリンガルに育てた娘さんから、説教され、励まされた康子さん、どんな気持ちでしょうか？